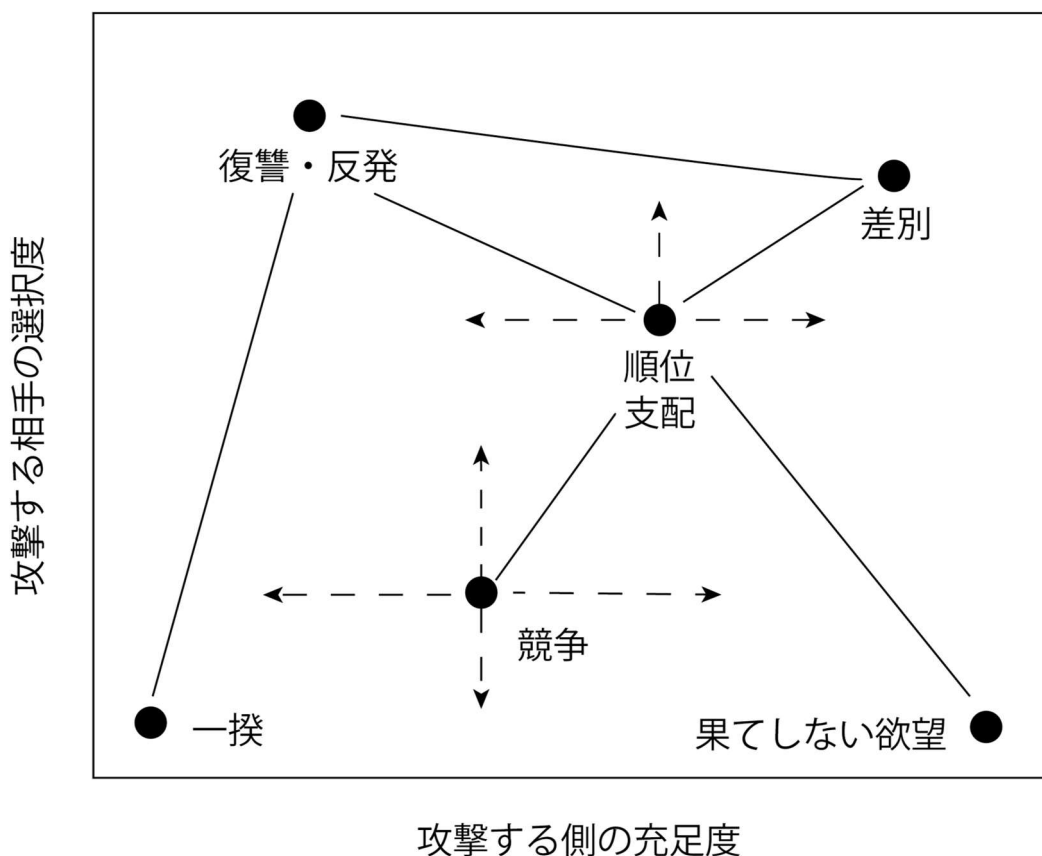


## ヒトはなぜ争うのか？

片野修

平和が希求されていながら、ヒトの世界は争いに満ちている。それはなぜだろうか？ この点を明らかにしなければ、平和を唱えても意味がない。そこで動物行動学の視点を取り入れつつ、ヒトはなぜ争うのか、争わなければいけないのかを考えてみたい。

争いは個人対個人の場合、個人対集団の場合、そして集団対集団の場合に分けられる。いわゆる戦争は集団と集団の戦いである。一方で、なぜ争うか、すなわち争いの動機に着目すると、争いは大きく六つに分けられる。私はこの六類型を、攻撃する側の充足度と攻撃する相手の選択度に着目して図示してみた。



### 1 果てしない欲望による争い

生きていくうえで十分に満たされているにもかかわらず、さらに大きな野望をもって他人や集団を攻撃して支配しようとするのは、果てしない欲望型と言えるだろう。豊臣秀吉やジンギスカンが自国を平定したのち、さらに国外に勢力を伸ばそうとした事実はよく知られている。とくに権力者はそれまでの闘争において勝利を取めているので、その欲望をどこ

までも拡げたいと考えるのかもしれない。この類の権力者は、他人の不幸をなんとも思わず、どこまでも自己の欲望を突き進むという点で、サイコパスと言えるかもしれない。しかし、攻撃にはリスクもあり、欲望がどこまでも満たされるとは限らない。果てしない欲望は対象を選ばないので、図では右下に位置づけられる。

## 2 差別による争い

他人や集団を差別し、卑しいと考えることによって攻撃する例は多く、ヒトはみな平等であるという価値観は近年生まれたに過ぎない。この場合も、攻撃する側は衣食住すべてで満たされており、差別によってえられる利得を守るために、攻撃を続けると考えられる。差別は果てしない欲望型と、すでに満たされている点では同じだが、特定の相手を攻撃する点で異なる。すなわち、差別・攻撃の対象は決まっており、それは人種、異性、隣人・隣国によってさまざまだが、継続して攻撃が加えられることになる。

## 3 生きるための争い

ヒトには生きるために食物と安全な住処が必要である。それがなければ野垂れ死にすることになるので、個人としては弱くても、余力の限りを尽くして、生きるための資源をえようとする。もし、貧困や病気によって、食物や安全が確保できない場合には、努力して働いたり社会保障を受けたりするべきであるが、それもかなわない状況になると、強奪によって資源を奪い取ろうとするかもしれない。この場合に、攻撃する側は、特定の相手を強く嫌うわけではない。たとえば一揆では、襲う相手は豊かであれば誰でもよく、個人的な恨みは伴わないことが多い。貧困国でおこる暴動や略奪も同じである。したがって、このタイプは図では左下に位置づけられる。

## 4 抑圧からの反発・復讐

権力者による果てしない欲望や差別によって生存が脅かされるほど、抑圧される個人や集団は生きるために反発する。いじめやパワハラに対して、反発したり復讐したりすることもあるだろう。その攻撃は反発する相手が決まっている点で、図の左上に位置づけられる。しかし、強い相手に立ち向かうことになるので、反発が失敗して、かえってひどい状況に陥ることも多いかもしれない。反発が大きいほど、差別・攻撃する側のコストは増大するので、解決に向かう可能性が開けることもあるだろう。相手の選択度におうじて、3と4の間にはさまざまな移行帯があると考えられる。

## 5 他人を支配して高い地位を確保しようとする争い

ヒトを含む動物は自らの成功をなすとげたいと意識的あるいは無意識的に思っている。この場合の成功とは、自らのもつ遺伝子を多くの子孫に広げたいとか、個人として生きることや繁殖することに成功したいといったことである。このような願望にしたがえば、他人と

同じ程度の成功では満足できないと考える欲の深い、あるいは攻撃的なヒトがいても不思議ではない。そして成功するためには、他人を支配して服従させることは一つの有効な方法である。逆に、他人の幸せを願い、過度な自身の成功を望まず、争いもしない、宮沢賢治のような徳のあるヒトは、ヒトの進化の過程で、ほとんど絶滅してしまった可能性が高い。

このタイプの攻撃は、集団の中で攻撃的で順位が高い個体によって起こされることが多いと考えられる。順位が高いほど、その序列のちがいが大きな意味をもつからである。一方で、順位の低い個体間の順位や争いは、それに勝っても大きな利益はえられないので、それほど目立たないだろう。そのために、このタイプの争いでは攻撃する側の充足度は比較的高く、相手の選択度も比較的高いと考えられる。図では中心よりも右上に位置づけられるが、攻撃側の充足度はケースによって変わるので、その幅を点線であらわした。他人を服従させるためには、暴力、知力、謀略、脅しなどが使われ、仲間をつくって権力を増すこともある。いじめやパワハラも多くの場合、このタイプの攻撃であるとみなされる。

## 6 競争に勝つための争い

他人を支配したいというよりも、目先の利益がほしいために競争する場合も多いだろう。食物やなわばり、異性などを複数欲する場合、それを取り合ったり、攻撃して奪ったりすることは、人間に限らず生物に共通した行動である。競争は資源が豊富にある場合には生じないが、限られている場合に生じ、競争する個体は互いに負の影響を受ける。

競争に負けたからといって致命的になるとは限らず、競争相手を必ずしも憎むわけではない。敵との関係が永続するわけではなく、多くの場合、競争関係は資源の量や分布によって、すぐに終わったり変わったりする。スーパーの特設コーナーで、特売品をめぐる客同士がとらあう場合、その競争関係は時間が経てば消滅する。その意味で、競争に勝つための争いは日常的であり、攻撃する側がどれだけ満たされているかは、ケース・バイ・ケースとなる。図では便宜的に攻撃する側の充足度を中程度のところに示したが、実際は低から高まで多様であり、その幅を点線であらわした。また、競争相手は一過性のこともあれば、永続することもある。

## 類型間の移行

図では六つの丸印を示したが、類型の間では移行があるかもしれない。最低レベルの生活から脱却するために、それを妨げる個人や集団を憎む場合には、相手を選ぶ復讐・反発につながるかもしれない。復讐・反発は差別や支配に対して起こると考えられる。また、差別する側は、差別される側に対して常に優位となり、序列を形成する。集団の中で順位をめぐる争う場合に、両者の実力が拮抗すると、いつまでも決着がつかなくて、競争関係がつづくこともあるだろう。また逆に競争において勝ち続けると、それが集団における序列を形成するかもしれない。順位で最高位を占め権力を掌中に収めると、欲望が肥大し、誰でも、どの集団でも支配しようとする果てしない欲望をもたらすこともあると考えられる。

図において右にいくほど、攻撃する側は充たされていると述べた。これを別の言い方をすると、右にいくほど権力をもっており、それによって多数の弱者を虐げることになる。個人と個人の争いのような些細なことではなくて、国家や民族間の紛争や戦争は多くの人間の犠牲を強いる点で悲劇的である。

### 争いを分類する意味

争いをなくそうとする場合、その対策は争いの種類によって異なると考えられる。3のタイプを減らすためには、社会保障を充実させて誰もが最低限生き抜くことができる生活を保障すべきである。4のタイプを減らすためには、社会の中でいじめやパワハラをなくすことが必要であるが、現代の日本でもいじめやパワハラは頻繁に起こっている。いじめについては、すでに別の論考で考察したが、問題はいじめる側とそれに加担する大人に責任がある。フランスや韓国で採用されているように、いじめに対して厳しい罰則を設けるべきである。これはパワハラについても言えることであり、法整備が進んでいるものの、まだ十分ではない。

1の争いは異常な権力者の果てしない欲望によって引き起こされるので、それを終わらせるためには権力者が変化するか、死滅するか、とって代わられる必要がある。権力者の周りには、その利権にあやかろうと取り巻きがいるので、変わるべきなのは権力集団と言ってもよいかもしれない。世界中で見られる独裁政権やそれに類似したものは、個人で立ち向かって勝つことはむずかしい。これまでの例を見れば、権力者が死亡しても、体制は変わらずに別の権力者があらわれることが多い。内部分裂やクーデター、市民革命は、これまでの権力への反発として起こり、体制を変えることもあるが、争いが絶えるわけではない。むしろ混乱が増して、次の争いを生むことが多い。

果てしない欲望をなくすためには、そのコスト、すなわち損失を増大させることが必要である。豊臣秀吉による朝鮮侵攻は、朝鮮半島での抵抗によって日本の損失が増大したことによる。侵攻によって多くの兵力が失われ、生き残った者たちの不満が増大すれば、侵攻を止める力になる。同様に権力者の横暴を止めさせるには、内部および外部からの圧力が必要であり、それには直接的な攻撃だけでなく、評判を落としたり、命令にしたがわなかったり、そのほか権力者の利益となるものを間接的に失わせる試みが考えられる。

差別が絶えないのは、差別することによって利益をえる個人や集団が、労苦なくして利益をえることができるからである。人種、性別、身分、出身地などによる差別は、生まれながら受けるものであり、それを達成するための努力を要しない。このような差別については、社会全体で法律や慣習を変えていかなければならない。具体的には差別しようとする個人や集団を批判し罰することが必要である。

やられたらやりかえすという言葉がある。同じ相手と攻撃と復讐を繰り返すうちに、しだいに攻撃が正当化され憎しみが増大することは、個人間でも集団間でも見られるが、当事者だけで解決するのはむずかしい。この場合には、どちらにも加担しない第三者に仲裁を求め

るのが妥当である。攻撃や憎しみは度がすぎれば、当事者たちの不利益になることは明らかである。

以上をまとめると、タイプ3と4については社会制度の充実によって改善が可能である。5と6については人間の性であるからなくすことはできないが、ルールにのっとって行われるように、制度を変えていく必要がある。一方、1と2については、容易に解決できると思われないが、その行為に対して損失が増大するような取り組みを進めるしかない。

結局のところ、ヒトとヒトとの争いは尽きることがないというのが結論である。そこでできることは、個人間の小さなトラブルは仕方がないにしても、差別、いじめ、戦争のような悪質なものを減らすことであり、本論考がその第一歩になれば幸いである。